

集合住宅建設に伴う道路築造工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

## 三日市ヒガシタンボ遺跡 2

2015

石川県野々市市教育委員会

## 例 言

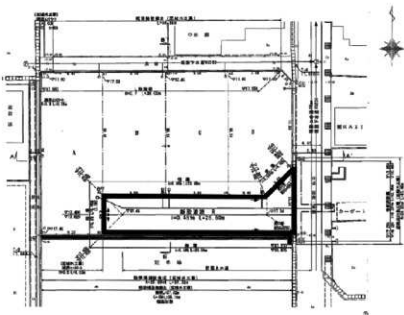
- 1 本書は、三日市ヒガシタンボ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在地は、石川県野々市市稲荷四丁目地内である。
- 3 発掘調査原因は、集合住宅建設に伴う道路築造工事である。
- 4 発掘調査にかかる費用は、小堀興次が負担した。
- 5 発掘調査は、小堀興次からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 6 現地調査及び出土品整理、報告書刊行は平成26年度に実施した。期間・面積・担当者等は以下のとおりである。

・現地調査期間	平成26年6月3日～平成26年6月18日
・現地調査面積	約180㎡
・現地調査担当者	田村昌宏(野々市市教育委員会文化振興課 課長補佐) 多間 聖(野々市市教育委員会文化振興課 主事)
・報告書執筆・編集	田村昌宏 多間 聖
・出土品写真撮影・報告書編集補助	菊地由里子(野々市市教育委員会臨時職員)
- 7 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - (1) 水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
  - (2) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
  - (3) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
  - (4) 遺構名称の略号は右記のとおりである。竪穴建物：SI 土坑：SK 溝：SD 小穴：P
- 8 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

## 第1章 経緯と経過

三日市ヒガシタンボ遺跡発掘調査業務は、稲荷四丁目地内における集合住宅建設に伴う道路築造工事を調査原因とする。平成26年4月、小堀興次氏から野々市市教育委員会(以下、市教委と呼称する。)に稲荷四丁目地内で集合住宅の建設の打診があった。建設予定地は埋蔵文化財包蔵地であったため、市教委は同年4月に試掘調査を行い、2ヶ所のトレンチを開けたところ、2ヶ所ともに遺構が確認され、全域に遺跡が存在することがわかった。集合住宅の建設については、埋蔵文化財に影響を及ぼさない掘削工事であったが、住宅地に取り付け道路築造の箇所については、発掘調査が必要となった。

三日市ヒガシタンボ遺跡の発掘調査については、平成26年5月19日に、石川県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取扱いの手続きを行い、5月22日に県からの承認を得た。その後、6月3日より発掘の現地調査を開始。大型掘削機で表土を除去し、その後、人力による遺構掘削及び記録作業を行い、6月18日に完了した。出土遺物の整理については、平成26年12月3日より出土遺物の洗浄を開始し、一部遺物の実測作業を実施し、遺物写真撮影及び執筆作業を経て、平成27年3月28日に発掘調査報告書を刊行した。



第1図 調査区図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の規模は南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇状部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。今回の発掘調査地である三日市ヒガシタンボ遺跡は、標高約16mと市内北部で比較的標高地の低い地域で、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。



第2図 野々市市位置図

### 第2節 歴史的環境

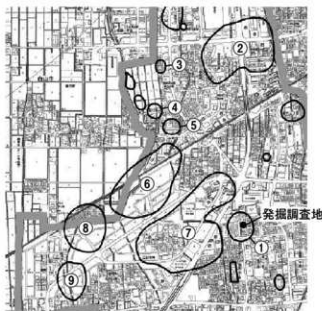
手取川扇状地扇端部にあたる野々市市の北部は、国指定史跡となっている②御経塚遺跡をはじめとする縄文時代後期～晩期の遺跡が集中する。これは、この地が扇状地の地下を流れる豊富な伏流水の湧水域であり、落葉広葉樹など豊かな林野が広がるといった、当時の人々にとって生活環境に最適な場であったためである。

農耕社会となる弥生時代に入ると、本遺跡をはじめ、近隣の③御経塚オツツ遺跡、④長池ニシタンボ遺跡、⑥二日市イシバチ遺跡、⑦三日市A遺跡、⑧郷クボタ遺跡などに集落が営まれる。これは、耕作地及び水利に適した土地を確保するため、標高約15mより下流域の金沢平野一帯に当該時期の集落が点在するようになる。

金沢平野では、古墳時代中頃までは標高地の低い場所に人々が集住していたようであるが、古墳時代後半になると、鉄器など道具の技術向上などから、市内南部域の未開発地域にも土地の開墾が見られ、扇状地扇状部にも人々の手が入ってくるようになった。

7世紀後半には、市内南西端に、県内最古の古代寺院である末松庵寺が建立される。末松庵寺跡は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、手取川扇状地扇状部一帯で耕作地開発が加速的に進み、周辺各地に集落が増大していく。

11世紀後半～12世紀頃からは、在地領主層の武士団の形成が図られるようになった。地元武士団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。林氏は鎌倉時代に没落するが、その後富樫氏が台頭し、14世紀後半より市内に守護所を置き、加賀国の政治・経済・文化の中心地として繁栄した。本遺跡や近隣の⑤長池キタノハシ遺跡、三日市A遺跡、二日市イシバチ遺跡、郷クボタ遺跡、⑨徳用キヤダ遺跡でも当該時期の集落を見ることが出来る。



第3図 遺跡位置図

No	遺跡名	時代
①	三日市ヒガシタンボ遺跡	弥生・古代・中世・近世
②	御経塚遺跡	縄文～中世
③	御経塚オツツ遺跡	弥生 中世
④	長池ニシタンボ遺跡	縄文～古墳・中世・近世
⑤	長池キタノハシ遺跡	弥生・中世
⑥	二日市イシバチ遺跡	縄文～古墳
⑦	三日市A遺跡	縄文・弥生・古代・中世
⑧	郷クボタ遺跡	弥生・古代・中世
⑨	徳用キヤダ遺跡	弥生・古代・中世

第1表 周辺の主な遺跡

### 第3章 基本土層

基本土層については、第4図の土層断面図を基に説明していく。1は現在の水田耕作土である。2の橙灰色粘質土は、1の水田耕作土に伴う整地層(床土)である。3の黒色粘質土は中世の包含層、4の黒褐色粘質土は古代の包含層、5の褐灰色粘質土は、古代より以前の包含層に想定される。その下の6の黄褐色粘質土は地山層である。

1	灰色粘質土(水田耕作土)
2	橙灰色粘質土(水田耕作土の整地層)
3	黒色粘質土(中世の包含層)
4	黒褐色粘質土(古代の包含層)
5	褐灰色粘質土(古代以前の包含層)
6	黄褐色粘質土(地山層)

第4図 土層断面模式図

### 第4章 遺構

#### SI 1

調査区北西隅で確認した古代の竪穴建物である。北面は調査区外に延びる。竪穴中央部にはSD 1が横断し、東面はSD 2に切られるなど遺存状態はよくない。形状は方形プランと考えられ、東西280cm以上、南北290cm以上、深さは床面から約20cm、方位はN18°Wである。北西端の調査区壁際で焼土ブロックが確認でき、周囲に土師器壺が散在していたことから、カマドが存在したかもしれない。竪穴内には複数の小穴が認められ、柱穴の可能性をもつが、中世溝SD 1と2や、中央にはSK 2が掘られ、竪穴の構造がわかりにくくなっていることから断定には至っていない。床面には土間状の貼り床が施されていた。

#### SK 1

調査区西端で見つかった方形プランの土坑である。西側半分は調査区外となるため、全体の様相は不明である。東西30cm以上、南北50cm、深さ約40cmを測る。土坑中央の遺構検出面上には、鉄鍋の完形品がうつ伏せの状態で見つまっている。また、青磁碗片と仕上げ砥石も出土した。

#### SK 2

調査区北西隅で確認した土坑で、SI 1の中央に位置する。形状は不定形で、穴内には2段のテラスや小穴がいくつも見られることから、複数回掘り直されていたかもしれない。大きさは東西155cm、南北180cm、最深部110cmを測る。穴の南側から、1須恵器環と、4土師器壺が出土している。

#### SD 1

調査区西端で確認した南北溝で、SI 1やSK 1の中央を横断している。長さ610cm、幅65～80cm、深さ約15cmを測る。南端では南北110cm以上、深さ約70cmの掘り込みが認められる。中世土師器片が見つまっている。

#### SD 2

SD 1の東隣にある南北溝である。長さ600cm、幅100～150cm、深さ40～45cmを測る。覆土から中世陶器片や土師器皿、拳大の自然石が見つまっている。

#### SD 3

調査区SD 2より東へ約5mの箇所で見つかった南北溝である。長さは470cm、幅43cmで、溝内の一部には深く掘り込まれた箇所が存在する。深さは40cm前後であるが、一部の掘り込み箇所では70cm近い深さをもつ。

#### SD 4

調査区ほぼ中央に位置する北西-南東方向の溝である。長さ670cm、幅45～60cm、深さ35～45cmを測る。底のレベルから、北西から南東へと低くなっていくようである。

#### SD 5

調査区南東隅で確認した北東-南西方の溝である。長さ670cm、幅50cm前後、深さ約15cmを測る。この溝から南東側の地山は低くなっていき、谷地になっていくようである。

### 第5章 遺物(第6図参照)

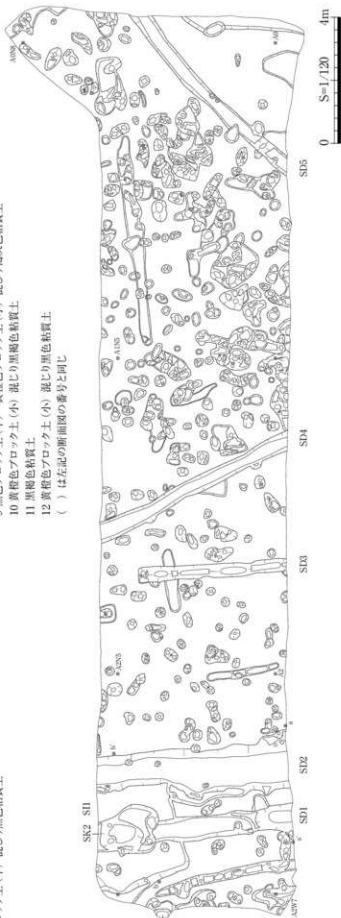
本調査で発見した遺物は約100点で、うち実測できたのは10点である。時期は古代と中世である。1～4は古代で、5～10は中世である。

1と2は須恵器環、3は盤であり、いずれも有台である。4は土師器壺で、外面に煤が付着しており、調理具として使用したものと考えられる。5は非クロロの土師器皿、6は珠洲焼罌鉢、7は加賀焼壺である。6と7は小片のため、径は出していない。8と9は青磁碗である。8の内面には刻花文、9は端反鏡描蓮弁文である。10は刃物の研削に使用した砥石である。

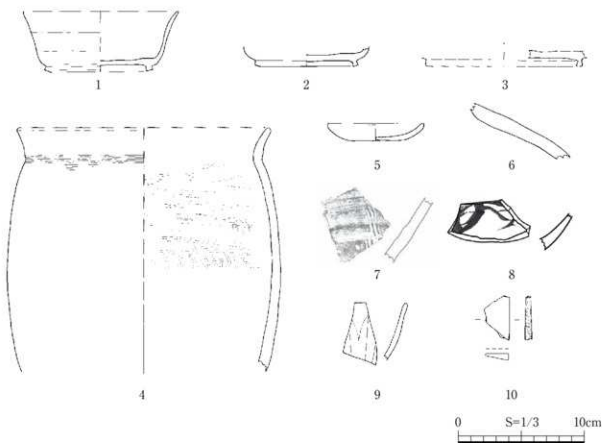


- |                         |                                   |                                     |
|-------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 灰色粘質土(粘土)             | 10 褐色粘質土                          | 1 灰色粘質土                             |
| 2 褐色粘質土(粘土)             | 11 黒褐色粘質土(4 包含層よりやや明るい)           | 2 黄褐色粘土(小) 混じり黒褐色粘質土                |
| 3 灰分混じり灰褐色粘質土           | 12 黒色アロックス土(小)・黄褐色粘土(中) 混じり黒褐色粘質土 | 3 黒色アロックス土(小)・黄褐色アロックス土(小) 混じり褐色粘質土 |
| 4 黒褐色粘質土(包含層)           | 13 黄褐色アロックス土(小) 混じり褐色粘質土          | 4 黒色粘質土(SD5)                        |
| 5 黒褐色粘質土                | 14 黄褐色粘質土混じり黒色粘質土                 | 5 黒色アロックス土(小)・黄褐色アロックス土(小) 混じり褐色粘質土 |
| 6 黄褐色粘土(極小) 混じり黒褐色粘質土   | 15 黄褐色アロックス土(大) 混じり黒褐色粘質土         | 6 黒褐色粘質土                            |
| 7 黄褐色粘土(中) 混じり褐色粘質土     | 16 黄褐色アロックス土(小) 混じり黒色粘質土          | 7 黒色粘質土(4 とほぼ同色)                    |
| 8 黄褐色粘土(中) 混じり黒褐色粘質土    |                                   | 8 黄褐色アロックス土(大) 混じり黒色粘質土             |
| 9 黄褐色アロックス土(中) 混じり黒色粘質土 |                                   | 9 黒色アロックス土(中)・黄褐色アロックス土(小) 混じり褐色粘質土 |

- |                           |
|---------------------------|
| 10 黄褐色アロックス土(小) 混じり黒褐色粘質土 |
| 11 黒褐色粘質土                 |
| 12 黄褐色アロックス土(小) 混じり黒色粘質土  |
- ( ) は左記の断面図の番号と同じ



第5図 遺構図全体図・土層断面図 (S=1/120, 1/60)



第6図 遺物実測図

## 第6章 総括

本調査は約180 mの小規模な調査区であったが、遺構密度は極めて高かった。確認できた時期は、古代と中世の2時期である。

古代の主要な遺構はSI 1とSK 2で、調査区の西端で認められた。本調査区の西側は三日市ヒガシタンボ遺跡の中心域にあたり、今回の調査で、古代集落の一端を確認することができた。時期は8世紀後半と考えられる。

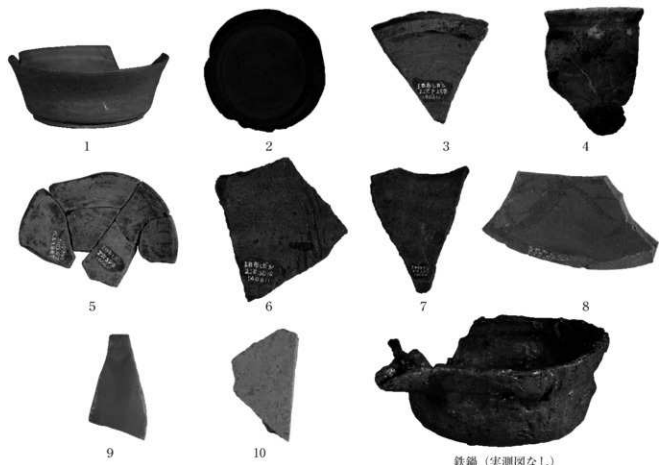
中世の主要な遺構はSD 1～3の溝状遺構である。これらの溝の方位は、ほぼ真北に近いラインとなり、集落内の区画及び、排水機能を持った装置と考えられる。SD 4と5は前述の溝と方位が異なり、遺物も見つかっていないことから、詳細な時期決定は見送った。

調査区の中央から東側にかけて、深さ20～50cmのピットが不規則に集中して見つかった。ピット群の中には古代土器の破片が出土しているものもあるが、掘立柱建物の柱穴とは考えにくく、雑木などの根幹の跡と想定する。

調査区南東端の遺構は希薄となり、谷地となって大きく落ち込んでいき、調査区より東方は自然河道になると思われる。前述したピット群は、この自然河道と並走するように見えることから、河に隣接して雑木などが垣根状になって生い茂っていたような状況であったと考えたい。

### <参考文献>

- 田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会  
 垣内光次郎 1999「石の文化史」『中世北陸の石文化I』北陸中世考古学学会  
 2003『野々市町史 資料編1 考古 古代・中世』野々市町史編纂専門委員会



鉄鍋 (実測図なし)



調査区全景



調査区西側



調査区東端



調査区西端

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	みっかいちひがしたんばいせき2							
書名	三日市ヒガシタンボ遺跡2							
副書名	集合住宅建設に伴う道路築造工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	田村 昌宏 多間 聖							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel: 076-227-6122							
発行機関	野々市市教育委員会							
発行年月日	西暦 2015年3月28日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミツケチ 三日市 ヒガシタンボ イロキ 遺跡	ヒガシタンボ 石川県 野々市市 イロキ 稲荷	17344	16001	36° 30° 35°	136° 36° 31°	2014.6.2 ~ 2014.6.26	180	記録 保存 調査
	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落	古代、中世		竪穴建物1 土坑1 溝7		土器、陶磁器、 鉄鍋		
要 約	三日市ヒガシタンボ遺跡は、弥生時代、古代、中世の集落遺跡である。本調査区では古代と中世の遺構・遺物を確認した。古代は、8世紀後半の竪穴建物1棟と土坑1基、中世は土坑1基と南北方向の溝を検出した。土坑からは鉄鍋の完形品が出土しており祭祀に伴うものかもしれない。当該遺跡の中心は、本調査区の西側にあり、今回の調査で集落域の一端を確認することができた。本調査区の東南隅は谷地となっていく。本調査区一帯は当該遺跡の東端部と考えられる。							

2015年3月28日 発行

集合住宅建設に伴う道路築造工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

### 三日市ヒガシタンボ遺跡2

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県野々市市矢作三丁目18  
高桑美術印刷株式会社